

午後のカーテン ● 武富純一

「ロッキー」を左右の耳に押し込んで拳振り上げ一日始まる
マスキングテープに乗った色として後でゆっくりはがしてやるう
ぷつぷつとゼロカロリーの千の泡 知的障碍の弟の声
でかい犬みたいにじつと居間の隅ひかりを溜める午後のカーテン
捨てられし折鶴蘭の枯鉢の小さき緑に立ちどまりたり
空っぽの車庫の連なる家々に今日もとどまる黒きクラウン
晩春の蛭池はたるがけの北町のフロントガラスのゴビの風たち
真つ直ぐに阪神電車は淀川を越えて父母、弟の町
極太のTのごとくに物干しの紺の稽古着うでを伸ばせり
商店街出る人々に被さりし影上半分たちまちに消ゆ
シャッターに貼らるる閉店挨拶は「ごさいま：」あたりで反り返りたり
おばさんのやさしい餌に寄る群れに少し遅れて野良のシャム猫
かさかさと言のしそうな父母へぼつりぼつりと明日は雨らし
ひげ剃りの跡の濃くなる弟のなかをゆつくりローカル列車
うつうつと悩み育てし歳月の母の背中が捜しものする
鉄棒の鉄のにおいとまいちゃんの「なんでおとうとあほになったん？」
ごみ箱に敷こうと開くレジ袋なかに小さき玉ねぎの皮
いじめられ泣く弟を遠くより見ていただけの兄でありしよ
往復とならずとどまる二、三台深夜の駅の自転車置き場
繰りかえす同じ話にこれからもずっと頷き続けてゆこう

受賞の言葉——武富純一

二〇〇八年に入会し、翌年から毎年の応募を続け、テーマや構成、表現等に悩み続けてきました。昨年はなんとタイトルを書き忘れ、「無題」との選考発表に私がアホさ加減を呪いました。

幸綱先生、選考の先生方、兵庫、京都、インターネット歌会の皆さま、そして伊藤先生はじめ、私に短歌を教えてくださいました。どうもありがとうございます。

それにしても着物姿の桐谷さんとハゲできるだなんて：最高の嬉しい思い出となりました。最後にこれから本賞に応募される方に大事なアドバイスをおつとつ。タイトルは絶対に書き忘れぬよう。

